日本武士道の敗北

狡知にたけた残忍な性格の米ソ指導者と、やはり中国で大英帝国に目ざわりな動きをする日本に嫌悪感を抱くチャーチル首相が組んでの日本潰しが始まった。国益のために手段を選ばぬ指導者に、仁義礼智信のさむらい日本は手玉にとられ、敵の計画予測どおり急坂を転がり落ちて行く。

経営管理講座
染谷和巳 309

弱肉強食の大帝国の権謀術数

帝国主義とは武力により弱国を植民地にして領土の拡大をはかる国家の体制である。

イギリスが先鞭をつけ、フランス、スペイン、ポルトガル、オランダ、ドイツ、ロシアが後を追い、百年後れてアメリカ、そして日本が加わった。

アメリカは原住民を殺戮しつくし、メキシコの領土を奪い、ハワイ王国を滅ぼし、スペインからフィリピンを勝ち取り、最後の最大の草刈り場である中国へ向かった。

日本は韓国を併合して、ロシアは蒙古を支配下に収めてやはり中国へ進出した。世界の帝国主義の国家がすべて中国に参集し、「我こそは中国の救世主」と援助協力を申し出ながら、お互いの出方をうかがい、利権獲得の機会を狙った。

中国は清王朝が衰微し各地に軍閥が割拠して無政府状態に近かった。各帝国は租界という治外法権の居留地を設けて自国民を続々と移住させた。租界は最高時、八ヵ国二十八ヵ所に及んだ。

領土を蹂躙される中国には外国の横暴を拒絶して跳ね返す力はなかった。強国の力を借りて国を守り国を統一する道しかなかった。

二十世紀に入り中国における権力争いは色合いがはっきりしてきた。

日本は清国最後の皇帝溥儀を立てて満州国設立に向かい、アメリカは蒋介石の国民党軍に飛行機まで含めた武器を支援し軍事指導を行い、ソ連は毛沢東の共産党軍にやはり武器の供与、軍事指導官の派遣を行って援助した。同時にアメリカはソ連と中国共産党軍にも武器や資金援助をした。

日本とアメリカとソ連、この三国が中国の命運を左右する帝国であることがはっきりした。

先号で述べたようにアメリカとソ連は「日本絶滅」で意思は一致している。

そしてF・ルーズベルト大統領以下のアメリカの上層部は同じ黄色人種でも日本人を嫌悪するのに比べて「中国人はかわいい」という〝気分〟を共有していた。

クリストファー・ソーン著「米英にとっての太平洋戦争」には、この戦争に蒋介石夫人の宋美齢が果たした役割が大きいとある。

九歳でアメリカに留学して大学を卒業した才色兼備の宋美齢はF・ルーズベルトやイギリスのチャーチル首相のみならずアメリカの政府高官や中国派遣の軍人まで魅了した。男たちは宋の言うことなら何でも聞いてやる気になった。それをよく知っている蒋介石は武器や資金の要求の折衝はほとんど夫人の宋に行わせた。

米英が「百万ドルしか出せない」と言うと宋美齢が美しい口をとがらせて堪能な英語で「二百万ドルなければ日本と戦えない、二百万出してくれなければ戦争をやめてしまう」と拗ねれば「しゃあないなあ、二百万ドル出してやろう」となった。

後に共産党軍に負けて台湾に逃げた蒋介石が莫大な個人資産を貯えていたのは、こうした宋美齢の交渉上手のおかげもあろう。

中国人は阿片戦争で負けてひどい目に合ったイギリスは嫌いだが他の白人国はそれほど嫌いではない。一番嫌いなのは日本である。

元はといえば朝貢していた属国のような日本。自分の配下と思っていた国に日清戦争で叩きのめされ、今は白人国につらなって大きい顔をしている。白人国の力を借りてまずこの不愉快なやつをやっつけなくては…。

この中国人の意思を大国米ソが巧妙に利用した。中国軍を強くして日本と戦わせる。本心は中国のためを思ってではない。日本を潰すためである。日本が中国と戦い続ければ消耗する。日本の兵は死傷し武器弾薬は乏しくなる。

日本の戦力の損耗。これが援助の目的である。いずれ戦うことになるであろう日本の戦力をどれだけ減らせるかが問題である。

米ソは国民党軍と共産党軍の尻を叩き戦意を煽り、ついには仲の悪い両者を〝国共合作〟という鬼手で団結させて日本を戦わせた。

昭和七年（一九三二）満州国設立。ソ連の侵攻に備えて関東軍（元は関東州守備隊）に精鋭部隊を投入して充実をはかった。

昭和十二年（一九三七）日中戦争（支那事変）勃発。日本陸軍は中国軍との戦闘を重ねると同時に、遠くインドシナ半島、マレー半島、インドネシアそしてインドまで侵攻して勝ち続けるが、米ソの思惑どおり兵力を消耗し、対アメリカ、対ソ連と戦う戦力を失っていった。

白人国に武士道は通用しない

米ソ首脳が日本絶滅を謀っていたとか、宋美齢のオネダリに男たちが鼻の下を伸ばして応じていたとか、お前は品のないことを言うが〝下種の勘繰り〟ではないかと思われる方もいるだろう。

だが政治や外交は生身の人間が行うのであり、日本の武士のごとく高潔な精神は稀有な例であり、判断決定の多くは人間の愛や嫉妬、憎しみなどの感情がベースになっている。

日露戦争で敗けたことを根に持っていたソ連は終戦間際になって不意に参戦し、日本人男性六十万人をシベリアに抑留（抑留とは聞こえのいい言葉だが、実は戦争捕虜であり、ポツダム宣言の「終戦後兵隊は即解散して国へ戻す」という約束に違反しており、ソ連は日本人捕虜を長期間各地で労役させ六万人を死なせた）、カラフトや北方四島などの日本領土を奪い取った。

スターリンの日記には「ついに今、対島の恨みを晴らした。ブラボー」と書いてあったそうである。対島は日本海海戦でバルチック艦隊が全滅した地である。五十年前の恨みを今晴らすことができたと歓喜するその精神は、何でもすぐ忘れる日本人には理解できないだろう。

白人至上主義のアメリカは黒人はもとより黄色人種も毛嫌いしたが、とりわけ日露戦争に勝った日本人を警戒し敵視した。

一九一九年（大正八年）パリの国際連盟で日本が提案した「人種平等条項」をアメリカのウッドロー・ウィルソン大統領が反対して廃案にした。

一九二四年（大正十三年）「排日移民法」ができ、日本人の移民は全面禁止になった。当時の日本人のアメリカ移民は年間数百人で、危機的な問題ではないが、大国と肩を並べる一等国になったと自負する日本のプライドを深く傷つける出来事であった。

その後不況克服のためアメリカは共産主義大好きのF・ルーズベルト大統領の指揮で、国が銀行や企業などの民間を管理統率するニューディール政策を実施。この新政策で国中が混乱するが、大統領の権限が現在の社会主義国同様に史上最高最大に上昇した。

これと並行してF・ルーズベルトは日本への石油、屑鉄などの輸出の禁止、ついには日本の資産を凍結して日本を追いつめる。

真珠湾攻撃の日。

「戦争をしないことを公約にして大統領に当選した）FDR（フランクリン・ルーズベルト）は動ずることなくその一挙一動に自信と統率力を示し、パナマ運河の安否をひじょうに気づかっていた。その夜、FDRが議会の首脳部のものと会見した時には彼はいくらか昂奮していた…。（実はソ連の諜報員である側近の）ホプキンスはFDRに、国民の感情をゆり動かす宣戦布告を発表することを求めた」（ジョン・ガンサー「回想のローズベルト」）（文中のカッコは私の補足説明）。

翌日ルーズベルト大統領は「この汚辱の日は永久に忘れられないであろう」という有名な演説を行い、国民の厭戦感情を一掃して戦時体制を作ることに成功する。

ソ連は真珠湾攻撃の半年前からドイツとの戦争に苦戦しており、イギリスとともにアメリカの参戦を喜んだ。スターリンは「こっちが片付いたら対日戦に参戦する」と米英に約束した。

敗色濃くなった昭和二十年初頭から日本は日ソ中立条約を頼りにソ連に日米戦争講和の仲介を再三お願いしたが、返事はない。そしていきなりの参戦。「まさかソ連が襲いかかってくるとは。条約違反ではないか。卑怯だ！」と歯噛みしたが、世界に武士道は通用しないことと政治と外交において白人国と比べて大人と子供ほどの力の差があることを思い知った。

情報戦は初めから大差の負け

力は物量の差だけではなかった。

通信機器未発達の日露戦争時、日本は情報を重視した。ヨーロッパに情報網を張りめぐらしロシアの動きを正確に把握すると同時に、各国にロシアに協力しないよう要請した。満蒙のロシア陸軍の鉄道や電話を破壊して撹乱した。

こうした強力な諜報組織による縦横無尽の活動が日露戦争を有利に導いたことは間違いない。

それが日米戦争では暗号解読、通信傍受などこちらの秘密は筒抜け。情報戦で大差で負けていた。